

# 改題 土楽たより

どうらく

Kogure 農場 4月号 (NO72)

2016年4月10日 (日) 発行 (毎月10日)

## 【農暦】、3つのVは無理でも！

○今日 (2日) はウォーキングコースにしている大堀川の桜が7分咲のように見えた。花冷えというが昨夕から肌寒い。脱ぎかけたセーターとジャンパーを羽織って出かけた。4日は清明である。すべてのものが清らかで生き生きとする頃のこと。若葉が萌え、花が咲き、鳥が舞う、生命が輝く季節の到来です。とあった。二十四の節気のことによく触れているが一番いい季節である。だが、こんな季節感とは程遠い心境である。やりたい、やらねばならぬという気持ちが、どこまで出来るかと不安な気持ちで揺れている。落ち着かない。畑(B)に仏の座とナズナが群生していた。2月には終わっている筈のトラクターでの耕起が3月末 (30日) になったからだ。仏の座とナズナは雑草にしか見えない。耕起で土色に変わった畑を単純に喜んでいる。自然を愛でる感性が萎える。実感である。

○ピッコロファームの仲間の援農で、剪定や畑と周辺整理が進んだが、その際に出た小枝や雑草の処分作業をする。モッテノホカ (食用菊) の移植、少量のキタアカリの植込みなどもする。農作業をしていると、あれもこれもと欲が出てくる。豆類は必須にするなど決めているが、あと何を作付するか逡巡が始まる。雑草に負けないカボチャにするか。里芋、トマト、葉物はと悩み始める。すでに決めていた筈なのにスケベ心がタネを蒔きたがる。欲が無くなったら終わりとも云う。生命が輝く季節とあっては、失敗つづきなのに、播種したい欲を抑えるのが難しい。

○生命が輝くと云えば、昨夜 (2日) のテレビである。日野原重明 (医師) × 篠田桃紅 (墨の抽象画の美術家) の“達人達”のテレビ番組をやっていた。104歳と103歳が生涯現役をトークしていた。感情が萎えるとか、欲が無くなったらとか言っている自分が恥ずかしくなる。長生きの秘訣はの問いに、日野原さんは3つのV (目標 (ビジョン) 勇気 (ベンチャー) 勝利 (ビクトリー)) を言い、篠田さんは秘訣などない普通にやっている。あるがままに、と答えている。論理的な男と感性的な女の脳の構造が見えて来たと言われていたが、私には気持ちの上でも3つのVが無くなって来ている。二人がハグされていたが、たたえ合うハグはいい。長生きしたいとは思わないが、生涯現役の希望は相当危なくなっている。ただ、土を楽しむ耕人ではありたい。



＜大堀川の桜＞7分咲き。肌寒く、花見には今一つ。2日撮影

二人の生き方にはあやかりたい。

○花冷え、冷雨には春の浮かれ気分を水を差される。これでバランスが取れているのかも知れない。小さな庭の芽吹きは日ごとに勢いを増し、緑一色（＊）の様相である。清明の次は穀雨(20日)である。土づくり、苗づくり、播種を楽しみたいと思う。

＊緑一色；麻雀の役満と同じで、リュウイソウと読む。麻雀はボケ防止にいいと謂う。

### 【楽農】トラクターで耕運！

<畑A>；空豆、ジャガ芋、里芋の植込みなど、  
ブルーベリーにアラヌカの敷き込み、

<ハウス>；ぼかし堆肥づくり（継続）

<畑B>；トラクターで耕運。草払機で除草

＊ピッコロファーム（18日）Iさん（6日）の援農  
に多謝多謝。



<半手製の葡萄パン>食パンに  
干し葡萄を。美味に。3日撮影

### 【楽市】イベント交流・直売など

○その他；魅力発信隊講演会（16日）元会社OB会（19日）共生の会・フィンランド  
報告会（26日）リボン館・講座（9日）に参加など。

### 【つぶやき=Tweet】漱石のことばだけを拾い読みしてみた

○本屋さんのレジで“青春と読書”をタダで頂いた。定価90円の月刊誌である。「漱石のことば」漱石没後100年、対談；姜尚中×小森陽一が特集されていた。漱石は帝大の講師だったが、2人共、東大の名誉教授と教授である。“いま漱石を読んでいる、どうしてこんなに古びないんだろう（姜）、百年たったいま、またリアリティが強く感じられる（小森）。百年前といまの、偶然とは思えない符号、年とともに、ますます漱石に惹かれています“と小見出しがある。夏目漱石と言えば千円札と思い財布から出して見たら野口英世になっていた。イギリス留学時に神経衰弱を病んだという漱石には親しみを感じていたし、若い時と違った漱石の読み方が出来ると思っていたので、関心があった。たまたま貰って手にしたのが漱石の特集だった。一気に読んだ。

○“呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。（吾輩は猫である）”。“恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ。（こころ）”など漱石のことばが続く。“鼻毛を抜く漱石と抜かない鴉外”は人間性の違いをよく表している。また、文部省から文学博士号の授与に対し、“夏目なにがしで暮らしたい希望を持っている”と云う手紙とともに証書を送り返している。明治国家に対する非常にラジカルな批判をもっていると同時に、冷徹なリアリストであったと人物評されていた。千円札になった人の人物評としては良い意味で合わないように思える。漱石のことばだけを拾い読みしてみたが興味が深まる。今の猫ブーム？とは関係ないが、「吾輩は猫である」から読ん

で見たいと思う。読書は出来そうで出来ない。努力してみる。

○少し前（23日）になるが、Tさんが“家族をつなぐロボットのお試し”をしているので来ないかと言われ、環境活動などをしている仲間とお尋ねした。シミュレーション体験したが、どこかで見た覚えがあると思ったら一年前の月刊誌の「てんとう虫2」の表紙を飾っていた。家族をつなぐニューフェスの小見出しで“外出中の母親の持つスマートフォンに、リビングのドアが開いたとの通知が届く。同時に「ただいまー」という音声メッセージ、小学校から子供が帰宅したのだ。「お帰り、冷蔵庫におやつが入っているわよ。手を洗ってから食べなさいね」その言葉を伝えるのが、ダイニングテーブルに置かれたボッコだ。”遠隔地にいる高齢の祖父母の見守りにも利用することが出来る。ツールになるとあった。



＜ロボットのボッコ＞ “ぼっこ”とは東北弁で子供のこと。Tさん宅で。23日撮影

○先月、元会社の友人と居酒屋で、囲碁で、4勝1敗で人口知能(AI)が勝利した話で盛り上がったが、その続きのメールが届いた。“先日の新聞記事に「人工知能 着々と作家修業」一破綻のない文章、1次審査通過—というのがありましたよ。人工知能に小説を書かせるプロジェクトの報告会を開いた。SF作家の星新一さんの名前を冠した賞。主人公の男女の設定やおおまかなあらすじ等を人間が与え、人工知能が名詞や形容詞を組み合わせて文章を作った。”という。先号の“舟唄の酒の爛”のメールの主でもある。

○技術が益々高度化する中で、人間の基本的なものが壊れているような事件が多い。格差、貧困などがベースにあるのだと思うが、親の病気や死別、虐待などで児童養護施設に入居の子供は約3万人（2013年2月時点）いると云う。入所希望したが入れず自殺した子供のニュースがあったばかりである。自殺者も約3万人いる。いのちと食の大切さを伝え続けた佐藤初女（94歳）さんが2月に急逝された。善意の活動も大事だが、社会的に支える（国の）あり方が問われているように思える。精神的にもだが物質的飢餓は想像を超える耐え難いものがあるのだと思う。5日には、妻の介護に疲れた82歳の夫が殺人のニュースである。社会が豊かになった分だけ罪深いのだと思う。

【後記】いよいよ春本番、芽吹きの時。笠間に、kogure農場にお越し下さい。HPに転載しています。

【特に編集せずランダムな構成にします】

発行者；Kogure農場・小暮虎雄  
住所；笠間市本戸4201-10  
携帯電話：090-9333-4135  
メール；[torao-k@nifty.com](mailto:torao-k@nifty.com)  
HP；<http://homepage3.nifty.com/toragigi/>